

令和紙



おりおりの記

相場の格言から振り返る

みずほ証券
取締役社長

浜本 吉郎

2024年を迎えた。私が属する証券業界では新年になると、色々な場で干支にちなんだ相場の格言が取り上げられる。今年は辰年。相場の格言は「辰巳天井」である。その後が続くのが「午尻下がり」なので、今年と来年に相場は高値をつけるということになる。

過去の辰年において相場がどのように動いたのか、振り返ってみようと思う。

今から24年前、2000年はどうだったか？

19,002円で始まった日経平均株価は、米国由来の「ドットコム・バブル」の進展に伴い、一時20,800円台をつけることもあったが、その後の金融引き締めを契機にネット関連株は急落。相場全体も大きく沈む展開となった。最終的に2000年末の日経平均は13,785円。その影響は翌年以降も続き相場は下落。2003年4月に底値をつける。まさに「辰巳天井、午尻下がり」が体現された形となった。

今から12年前、2012年を振り返ってみる。前年2011年に東日本大震災が起り、日本全体としても今一つ元気が戻らない。日銀による金融緩和で一時的に相場が戻っても、欧州債務危機が懸念され、世界的にリスクオフとなり、時に日経平均は8,300円を切ることもあった。空気が一変したのが年末。第二次安倍政権が発足し、大胆な金融緩和と積極的な財政政策を打ち出した。いわゆる「アベノミクス」期待により、日経平均株価は上昇。年末に10,395円と年初来高値をつけることとなっ

た。

翌2013年には黒田日銀総裁が発表した異次元金融緩和が「黒田バズーカ」とも呼ばれるほどのインパクトを呼び、相場全体を上向かせた。

結果として2013年も年末に年初来高値を記録し、株高の流れは2015年迄続いていく。格言に言う「天井」は訪れなかった。更に言えば、その後の上げ下げや円安なども巻き込みながら足元の日経平均33,000円台迄株価は順調に上げ基調を10年以上持続させている。

今年はどうであろう。世界の分断は深刻度を増し、人手不足による供給制約は世界共通の課題である。インフレも未だ油断は出来ず、金融当局の政策動向にも注視が必要だ。米国の大統領選はその後の社会・経済に大きな影響を及ぼす可能性がある。新NISAの開始やパリオリンピック・パラリンピックなど明るい話題もある。

格言通りになるかは分からない。当たる、当たらないよりも、格言の戒めに照らして、様々なことに思いを馳せることに意味があるように思う。

